

人それぞれに個性（認知症）

人それぞれに個性があるようにその人だけの症状の出方がある。

それにプラスして、その人の背景が重なることによって、より個別性が求められる。

いかに、その人が何を思っているのか、何が嫌なのか、好きなのかを知っていくことがまず必要だと思う。だから、最初からこの人無理っていう概念を持つのではなく、どうしたら意思が通るのかを考えていくことでその人にあった対応ができると思います。

そこで、上手く対応できると、最初は拒否されていて、嫌な顔されていてでも私たちが笑顔で対応して話を傾聴することで変わります。この、笑顔って大切。笑顔で話すことで、認知症で出きることが狭まってしまった人の無力さや、虚しさが少しでも救われるんじゃないかな。「認知症のあの人」って思われていた人がしっかり、人として見られる時間が1秒でも長く続けられるようにサポートしていくことが認知症ケアとして大切だと思います。

エピソード

認知症の母が毎日決まった時間に徘徊をしているとスタッフから聞かされた兄弟は毎日決まった時間になぜ、徘徊するのか原因について話し合いました。

その時間が「午後の2時」

もしかして私たち幼い兄弟を幼稚園に迎えに行く時間なんじゃないかと思ある日、母が外に出ていこうとしたので兄弟は母に「今日は幼稚園お泊りだよ」と耳元で伝えると「あーそうだったね」と言い家の中に入ったそうです。

母は若き日の自分に帰って幼い兄弟を幼稚園に迎えに行こうとしているのかと兄弟はその時母から与えられた愛を感じその場で号泣したそうです。

「おくりもの」、深い愛情の贈り物を母からもらった愛をもらったんだと気付いたそうです。

認知症の行動にはその人の生きてきた中で大切に思っていることが記憶の中に存在してると感じたエピソードでした。

皆さんも認知症の利用者様の対応を考えていきましょう。